

かな式愛の物語

大村伸一

この物語に含まれる文字には言語活動や理性の健康をそこうものも含まれています。決して声に出して読まないでください。

「「さ」のその腰つき、セクシーだよ」

「「ち」の体の線の方がそそるわ」

そう言って「さ」と「ち」はゆっくりとお互いに近づいた。近づくにつれて呼吸は速くなり、心臓が破裂しそうなほど激しく鼓動し、汗がしたたりはじめる。

「さ」は汗のせいで「ぎ」になりながら「ち」の体を引き寄せ「ち」は流れる汗で「ぢ」になりながら「ぎ」の体を強く抱きかえした。

「この横の線が」と言いながら「ち」は「さ」の横線を指でなぞりながら舌でなめてゆく。

「さ」はその快感にたえながら「ち」のゆったりと曲がった曲線部分をなでながら唇を触れる。「ち」と「さ」の中央にある鋭角の部分が次第に近づき、ふっと触れるとき、二文字は衝動に耐えられず強く密着しひとつになった。

抱き合っただけになると、深いおだやかな気持ちに包まれて、二つの文字は「古」になってしまう。強く強くくっついた二文字は、もう離れることはないと確信した。汗はそのときにはもう乾ききっている。

ドアを叩く音がする。しつこくいつまでも叩いている。入ってきたのは、かな式市警察の警官が六文字。「古」はその場で逮捕され、ただちに市の南側にある門へ運ばれる。門の前に連行してきた警官がずらりと並び「古」は外部へと追放される。二度と戻ることはできないと「古」は知っている。

「古」が外部に消えてゆくときも「ち」と「さ」に分かれることはなかった。

二文字のいた部屋の床には乾きそこねた「」だけが残されていた。

部屋に仕掛けられた監視カメラの記録には、警官の中に「そ」と「ふ」が映っていたのだが、翌日、再チェックが行われたときには、その二文字の映像は別のひらがなに変わっていた。

かな式市警察の署長である「ん」は、毎朝ベッドの中で伸びをする。伸びをすることで字分の体調を調べるのだという。誰かが見ていたら、それが「ん」ではなく「く」にしか見えなかっただろう。「ん」が「く」に変わるたびに「く」は何故字分がこの見知らぬベッ

ドにもぐりこんでいるのか不安に思う。だが、一瞬の後「く」は「ん」に戻ってしまうので「く」の意識はそれと同時に消滅する。

「ん」は字分の下半分の波打っている部分がことのほか気に入っている。歩くときには必ず、その部分を見せびらかすように波打たせて歩く。交通課の警官たちは、それを見て警察署長にだけはなりたくないものだと噂しあっている。

昼になると警察署には弁当屋が訪れる。売り子の「こ」は、毎日11時3ら分に販売を始めるのだが、署長の部屋からその様子がとてもよく見える。三日前に「ん」の指示で署長室のドアが特殊なレンズに交換され、その焦点に「こ」の姿が入るように詭えられているからだ。「こ」が商売をはじめると「ん」は小銭を握りしめて「こ」の前の列に並ぶ。決してあわてて前に進むことはない。なぜなら、行列がゆっくり進めばゆっくりであるほど「ん」は「こ」をずっと間近で見られるからだ。

「こ」の前に立って「ん」は言う。

「書き順弁当をもらおうか。文字にとって書き順が一番大切だからね」

そして微笑みを浮かべるのだが「こ」は「ん」の言葉に返答を返すこともなくただ弁当を渡す。

「ん」は署長室で弁当を食べながら、ずっと「こ」の様子を眺め続けている。口元に浮かべた微笑みはその間もずっと消えることがない。

昼食の販売が終わると「こ」はシャワーを浴び拭うこともなく裸のまま夕食の弁当の製造を始める。濡れた体が「ご」のように見えることを「い」は知っている。「ご」は突然自分を見つめている「い」に気づき、字分がなにも着ていないことに気づき、料理がまったくできないのに弁当を製造していることに気づき、ああまた「こ」に濁点がついてしまったのかと思うのだが、そのころにはシャワーの滴は乾いてしまい「ご」は「こ」に戻っている。

「今日は何が安かったの？」

「こ」が「い」にそう尋ねるのは「い」が弁当会社の仕入れ担当だからだ。「い」は今日の市場の傾向について報告し、発砲材でできた箱から「草」や「肉」や「魚」を取り出して見せる。

「抽象的ね。もっと具体的な名詞はなかったの」

「今日は時化でこれしかとれなかったらしいよ」

そう言いながら「い」は「こ」の上の線に触れようとするが「こ」はそれをふりはらい

「今は仕事」

と言う。だがその声はすこし潤っている。

「またあいつと会ったんだね」

と「り」は「こ」に言う。

暗い部屋の中の灯りはテレビの画面の輝きだけで「り」と「こ」の姿が暗闇の中にうっすらと見える。部屋の中には所狭しと本が積み上げられているが、本はきちんと揃えられているので、かえって部屋は広く見える。本はどれも同じ装丁で背表紙には「国訳辞典」という文字が印刷されている。

「仕事だからね」

「こ」は裸になった「り」を背後から抱きしめ、左側の縦の線を愛撫する。それから、右側の線の上端にすこし息をふきかけ、口づける。

「り」の体が少ししなり、密着したのであやうく二文字は「け」に一本横線のはいったような奇妙な形になりかけるが「り」がとっさに体を離す。ひらがなでないものになってしまえば、元に戻ることはとても難しくなる。

「君はひどくわがままだな」

そう言うと「こ」は服を着て、部屋を出てゆく。

「り」はうんざりしたようにたばこを出し、火をつけてくわえるのだがその姿に似た文字はなかったので「り」のままにいる。

部屋の外ですこし室内の様子をうかがっていた「こ」はもう二度とここには来ないでおこうと決心する。ここに来るたびに、何かしてはいけないことをしているような罪悪感を感じてしまうのだ。だが、もう幾度となく「こ」はこの部屋から帰るたびに同じ決心を繰り返している。

「こ」はその足で市場に向かい「あさほか菜」と「ぞっ根」、それに「あい肉」を買う。

「い」はいつも嘘をつく。具体的な食材のない市場などというものは無い。

部屋の中は明るく壁も床も真っ白い何か金属のようなものでできている。棚も机も様々な機械も同じ金属で作られているらしい。備品が触れるたびに甲高い金属音がする。強化ガラスで仕切られた奥の部屋にはベッドがひとつあり、そこに何か文字が横たわっている。頭の部分はたくさんのケーブルや医療装置で覆われその文字が誰なのかは分からない。その文字はいつも「患者」と呼ばれている。その患者をとなりの部屋からじっと見つめているのは「め」だ。全員一致で選ばれたのだが「め」はこの仕事の意味がわからない。いつ目覚めるか分からない文字の面倒を見るなど何の意味があるのだろうか。

目の前のコンソールにはたくさんのスイッチやランプがある。「め」が患者について知っていることは、このランプの点滅が語ることだけだ。そして、一番上にあるスイッチを押せばあの文字はすぐに失われ「め」はこの仕事から解放されるだろうと教えられている。仕事の説明に来てくれた文字は、もしもの場合のためと言って、そのことを付け加えた。あの説明をしてくれたのは「ぬ」だったろうか「ね」だったろうか。ずいぶん昔のことなので、はっきりと思い出すことができない。

もしかすると、このすべてが「め」の適性を調べるための試験であり、そのスイッチをい

つどのような状況で押すかあるいは押さないかを試されているのかもしれない。そしてスイッチを押したらもう二度と昇級試験を受けられなくなるのかもしれない。あるいはそのスイッチを押すことが昇進試験の受験資格になるという可能性もある。どちらなのかは分からなかった。「め」はそのスイッチを眺めながらどちらの可能性のほうが高いのかを考える。

「め」は目だけを動かして強化ガラスの内側とランプの点滅を見つめ欠伸をこらえながら椅子に座っている。

モニターの画面に映る退屈そうな「め」を眺めながら「ぬ」もまた欠伸をこらえていた。なんで字分が「め」などの監視をしなくてはならないのかと思い「ぬ」はいらいらしながらゴミ箱を蹴る。

字分より「よ」とか「ゆ」の方がこんな単純作業には向いているじゃないか。字分はもっと創造的な仕事が合っているのに。そんなことも分からないのかな。上は。

「ぬ」はそんなことを考えながら、モニターの中の「め」が貧乏揺すりをするたびに、カウンターの数字を一つ増やす。

退屈だけでなく、足をのぼすことも禁じられているので、硬直した膝がひどく痛む。最近では、工作中だけでなく眠るときになっても痛み、足を伸ばそうとするだけで激痛が体を震わせるから、丸めた足の痛みに泣きそうになりながら「ぬ」は仕事を続けなくてはならない。体質のせいかな本当に涙が流れることはなかった。

「ね」はモニター画面の中の「ぬ」を監視している。「ね」は「ぬ」の行動を知るにつれて「ぬ」がとうていこの仕事をまっとうできない類のアマチュアであり、もしも字分の裁量で決定できるなら、今すぐにでもこの仕事から「ぬ」をはずしたいと思っている。できれば「ぬ」のかわりに「め」の監視をしたいし、さらに「め」の仕事さえ、字分のほうが適している。

定字報告の備考には必ずそのことを赤いインクで書いているのだが、上司はそれを無視し続けている。

仕事に優れている字分のことを上司が皆怖れているのだろうと「ね」は考え、字分の報告書が上司の誰かによって改竄され、字事課に字分の希望が伝わっていないのに違いない。他には考えられない。

「ぬ」がまた舌打ちをした。「ね」はメモ用紙にまたチェックを入れ、いつもより多い舌打ちの数の理由を考えはじめた。

水中は地上とは別の音に満ちている。初めて水中を体験するひらがなは、この水中の音を正しく聞かないから、水中が静かで落ち着くなどと言うのだが「ぱ」はそんな意見は鼻で笑ってとりあわない。

深海でも自由に動きまわられる「ぱ」はずっと海底で暮らしていて、水面より上にできることはほとんどない。最後に地上に出たのがいつのことだったのかも忘れてしまった。海底には他に四文字が住んでいるが、お互いによく話をする。水中で生活する文字同士、共通の話題が多いからだ。勿論、直接会う訳ではなく、まるで独り言のようにつぶやくだけだ。海中では、どんなに離れていても、物音は即座に伝達される。世界に五つある海底のそれぞれを領分とするひらがなは、つぶやくだけでお互いに話すことができる。その姿は他のどの文字にも見られることはないから、つぶやきで会話ができることは海底の秘密になっている。

「え」はたびたび不審尋問を受ける。ただ道を歩いているだけなのに仕事を聞かれ住所を尋ねられる。ただ食事をしているだけなのに画数を聞かれ読み方を尋ねられる。「え」が「え」であることを証明するために、そのたびにたくさんの書類を出して説明しなくてはならない。「え」は誰かの嫌がらせなのかと疑っているが、不審尋問をしてくるのはどうも本当の警察官らしい。

警官の話によると「え」によく似た犯罪者がこの町に来ているらしい。警官の説明ではそれはただの犯罪者ではなく凶悪犯らしいのだが、それが誰なのかは話してはくれない。

「捜査上の秘密ですから」

どの警官も口を揃えてそう言う。

かな式市で最も有名なひらがなである「ら」は市が設立されて以来最も愛されている歌手である。

「ら」の歌う歌は市のどの文字でも知っているが、歌うことができるのは「ら」だけだ。それはずいぶん昔に市の条例で決められたもので、違反字はただの書き順になるまで分解され下水道に捨てられるのだという。

「君、食事はどう」

コンサートの後「ら」はその日初めて「ら」のコンサートを見に来た「つ」に声をかけた。なまめかしい目でみつめられるとたいていの文字は抵抗することができなくなる。「つ」も誘われるままに「ら」と食事の約束を交わす。

翌日、「ら」の公式ウェブサイト「らららの歌声」

(http://blogs.yahoo.co.jp/la_laa_laa_laa)にアップされた日記によると「つ」はみごとに

「ら」の下の部分と重なり、そのまま町を歩いても、誰にも気づかれなかったという。「そんな恥ずかしい性癖を公表すると警察に目をつけられますよ」と、かつての愛字「と」が忠告しても、それはただの嫉妬だと言って「ら」はとりあわない。

交通課から犯罪課へ移動になった「ほ」の初めての仕事が密入国文字の逮捕だった。同期の「ろ」や「も」と、あとは面識のない「ふ」や「そ」とチームを組み、犯罪文字のアジトを急襲した。

アジトにいたのは一文字だけだったが、初めて見るその文字は奇妙に入り組んだ恐ろしい形をしていて、どんな書き順なのか想像することもできなかった。「ほ」は字分の二本の横線がふるえないように押さえながらその文字を確保した。実際に確保したのは経験のある「ふ」と「そ」であり「ほ」は縛るときに手を貸しただけなのだが、あとで報告書を見ると「ほ」が最初にあの文字を倒したことになっていた。

おかしいなとは思ったが、そのために表彰されることになり、皆から賞賛されたので、異議を唱えるチャンスをなくしてしまった。

翌日、記録ビデオを確認していると、活躍したはずの「ふ」と「そ」がいない。そのかわりにとでもいうように「ゐ」と「み」がいて、「ほ」が確保した文字に手錠をかけている。奇妙なことだと思い「ろ」と「も」に確かめてみても、二文字とも同じように「ふ」や「そ」が警察にいるわけがないではないか。たぶん初めての逮捕で気が動転してしまったのだろうと答えた。おかしいことがあるものだと、もう一度よく思い出してみると「ふ」と「そ」はどちらも指名手配中の凶悪犯罪文字であり、未だ行方不明のはずだ。いや「ふ」は字分が逮捕し尋問したという記憶もある。だとすると昨日のことは勘違いだったのかと頭をひねってしまう。そのとたん、頭をひねったせいで「ほ」は「む」に形が変わり、これまでのことを一切忘れてしまった。

薄暗い部屋の中は、テレビの画面の輝きによってだけ存在を許されているかのように儂く、画面に映る映像が変わるたびにゆらめいている。

音声を消した画面では「ら」が何かを絶唱し、それに観客が熱狂している場面が次々と変わってゆく。

その輝きの中で、部屋の中に整然と並べられ積み上げられた本が天井にまで届いている。

本の背表紙には「国語辞典」の文字が読める。

本の山と本の山のほんの少しの隙間で「り」は腹ばいになってテレビの画面をながめてる。タバコの火が明るく輝く。

「これ誰？」

「り」が画面を見ながら尋ねると、近くの本の陰から声が答える。

「あれは・・・確か、「ら」という歌手じゃないかな」

そしてもう一つの声が補足する。

「人気があります。毎日相手を変えて遊んでいるという噂もあります。あんなにセクシーな形では仕方ありません」

「り」は興味がなさそうに言う。

「ふーん。人気あるんだ」

そう言うのと声のしたあたりの本の山をなげやりに崩す。そこには全裸の「し」と「へ」がお互いの曲がった部分にゆっくりと愛撫を加えながら、その快感に耐えていた。

「り」はじろりと二文字の様子を見て、冷たい声で命じる。

「はやくひとつになっちゃえよ」

「し」と「へ」はその声に怯えたように一瞬震えると、愛撫の手を早く強く動かしはじめる。二文字は快感に耐えることをやめ、大きな声であえぎ、そして体を離れたまま、絶頂を迎えた。

そのとき、「し」と「へ」は組み合わさり、もうひとつの「り」になる。快感の余韻にぐったりとしている「り」を見て、タバコを捨てると初めからいた「り」が新しい「り」に近づいてゆく。「り」は「り」の左端の一番下のとんがりをつかむと、自分の同じ部分をぴったり重ね、口づける。それから、他の部分も順番に重ねてゆく。

二つの「り」は一つになり、ぶるっと体を震わせると、さっき捨てたタバコに手を伸ばして、また吸い続ける。

「嫌いだな。「ら」だっけ」

そういうと「り」はテレビのチャンネルを変える。

「ん」は朝の訓辞の後、なかなか口を割らない「ふ」の尋問の様子を見るために尋問室へと向かった。

マジックミラー越しでも「ふ」の傷だらけの顔を見ると腰が引けてしまい、あやうくまた「く」になりそうな心を叱咤して「ん」は鏡の前にしがみつく。

机を挟んで「む」と「ふ」は向かい合い、机の表面に視線を落としたままの「ふ」を

「む」は正面から厳しい顔で見つめている。

だが、尋問は「ふ」の黙秘によってまったく進展していなかった。尋問をしているのは新人の「む」だが、なかなか優秀でこれまで何件もの事件を解決している。これだけ手こずるとは「ふ」が一枚も二枚も上手ということかと「ん」は考える。

しかし「む」は自信ありげに「ふ」に詰め寄る。

「お前、「ふ」じゃないだろう」

突然そう言われ「ふ」は不審な表情で「む」を見上げる。

「凶星だな。お前がずっと黙秘を続けている理由を考えてみたのさ。それで気がついたんだ。何度も記憶をたどってみたよ。注意して思い出せばすぐに分かった。お前は「い」と「ろ」だ。どうだ凶星だろう。

「ふ」でないとなればこれで尋問は終わりだ。拷問に切り替えるから覚悟しておけ」

「む」はそう言って、相手の返事も聞かず立ち上がり部屋を出て、「ん」のいる隣室に

やってきた。

「あれは本当なのかね」

「ん」が訪ねると「む」は自信を少しも崩すことなく、間違いありませんよと答え「ん」と並んで隣部屋の様子を見る。

「ふ」はふてくされて天井を見上げたりマジックミラーのほうを見たりしていたが、やがてぶつぶつと独り言を言い始めた。

「・・・どうかな。まさか・・・ふに・・・よりもよっていろかよ・・・もうすぐ・・・さえ分からなければ・・・まあいいか」

そして「ふ」は立ち上がり、ドアに向かっていく。机につなげられていたはずの手錠はずれていて、自由に行動している。ドアの前で開けと静かに言うと、扉が開き「ふ」は何もなかったかのように外に出てゆく。

手錠がはずされていることに気づくやいなや「む」は部屋を飛び出したが、廊下に出たときには「ふ」の姿は廊下の反対側の突き当たりにはいた。何重にもなっている暗証文字の必要な扉が「ふ」の前で次々に自から開いてゆく。「む」は携帯で応援を呼びながら全力で追いかけるがその差は広がるばかりだ。「ふ」はあわてる風もなく、警察署の表門から外に出てゆく。不思議なほど警官は一人もいない。「ふ」の姿が道路に止まっていたありふれた車の中に消え、車はそのまま走り去る。「む」は車のいた場所に立ち、去った車の方向を見るが、警察の車は一台も来ない。あの署長は無能か。そう怒りをこめて振り向くと「ん」が啞然とした顔で門のところに立ちすくんでいる。そして再び走り去った車の方向を見ようと体をよじって振り向いたとたん「む」はねじれてしまい「お」になる。

俺は警察官なんだな。しかも、容疑者を逃がしてしまったらしい。「お」はぼんやりとそう考えていた。

その日の夕刊はこの脱出劇が一面で「ふ」をヒーローのように扱っていた。

その時間、警察署にいたすべての警官（署長と「お」をのぞく）は、飛行機で護送されてきた「そ」の護送のため空港舎へ出払っていたのだという。それでも、なぜ、幾重にもあった扉がすべて勝手に開いたのか、理由を誰も説明できなかった。

あれは「ふ」だったのか、それとも「い」と「ろ」だったのか、その疑問は警察内部の極秘事項であったから新聞で取り上げられることはなかった。

翌朝、「ん」が自宅のベッドの中で自慢の波打つ下の線をまっすぐに伸ばし「く」になって動けなくなっているのが発見された。そして「ん」の行方はまったく分からなかった。

「ぴ」は吐いた泡が水面に向かってどこまでも昇ってゆくのを眺めていた。

水面は明るいはずだが、この海底は深すぎて水面の輝きが届くことはない。

泡はくるくるとまわりながら昇ってゆく。

「最近、「ぷ」とは話をしたかね」

その声は「ぺ」だった。はるか彼方の深海に住む同士だ。

「いえ。このごろ話しかけても返答がありません」

「やはりそうか。他の皆もそう言っているよ。どうも「ぷ」は地上に行ってしまったようだ。さびしくなるな」

海底のひらがなは無口だ。それだけ言うと「ぺ」は沈黙してしまった。「ぴ」もそれきり話しかけることをやめた。

水がすこし温かくなっていた。季節が変わったのかもしれない。

かな式市の駅前にある安宿で「ふ」によく似た文字が逮捕された。

その文字は夜毎「ろ」や「い」や「し」や「く」や「う」をホテルに連れ込んでいたらしい。連れ込まれたひらがなが、ホテルから出てきたところを見たものはいない。部屋に警官が突入したときも、そこには「ふ」しかいなかった。

尋問に対して「ふ」は何も答えず、何も隠していないよとでもいうように両手をあげるので一瞬その姿は「子」のように見える。尋問官の「む」はそれを見ても何も怖がっているように見えなかったが調書の文字はすこしふるえていた。

「ふ」はにたりと笑い、両手を元にもどす。この尋問のあと、警察署から脱出したことを思い出した「ふ」はまたふてぶてしく笑う。「む」も「ふ」が警察署から逃げ出したときのことを思い出したので念のために「ふ」の両手を机の足に手錠でつないだ。だが、その手錠もはずされてしまうことを「む」はよく覚えている。

「む」はそれでも「ふ」が逃げ出すことを知っていたので不安だった。記憶は繰り返すと言うからな、とつぶやいてみても、不安は消えず、つい体をねじってしまう。そのとたん「む」は「お」に変わる。

無表情な「お」は、ああ俺はまた警察官になったなと他の文字のこのように感じている。

機内アナウンスがもうすぐかな式市空港に着陸することを告げた。「わ」は三日間の飛行中、ほとんど眠っていたが、まだ眠くてたまらなかった。飛行機があまりにも高速で移動するから文字に含まれる意味の部分がずっと後に置き去りにされてしまい、こんなにも眠くなるのだろうか「わ」は思った。

飛行機から降りて空港のトイレに入ると、鏡に映る字分の姿がどこか妙な具合になっていることに気づいた。なにか「わ」ではなく「れ」のように見えてしまう。鏡の中で「れ」は意識を取り戻したので、字分が字分ではないような気分になり何か憂鬱でたまらなくなる。床に膝をついて横たわり、すぐにでも休みたいと思うのだが、体が思ったように動かない。そのとき「れ」は字分が鏡の中の存在であることに気づく。

「わ」は鏡の中の「れ」が食事も飲むこともできずに衰弱してゆく姿を見て心を痛める。

「れ」がまったく動かなくなり警察で検死を受け、衰弱死であると断定されたとき、若い

警察官からその説明を聞きながら「わ」は文字には食事や水分が本当に必要なのだろうか
と、ふと疑問を感じる。

深夜、ベッドの中に今日のペットの「つ」を残し、「ら」はかな式中央通りを急ぎ足で歩
いてゆく。手には表紙がとれかけてそれを丁寧に修復してある「国誤辞典」を抱えている。

すれちがう文字は、その古びた「国誤辞典」に気づくと驚いて「ら」に道を開ける。

「わたしより辞典のほうが目立ってるじゃない」

と「ら」は辞書を叱る。辞書はそれを聞いてすまなそうな表情を浮かべ、すこし小さくなる。
それで「国誤辞典」という書名は見えなくなり「ら」は少し満足したようだ。

その部屋はいつ来てもなにかひらがならしくない匂いがして「ら」を不安にさせる。部屋
の中の室内灯のスイッチは切られていて、壁のテレビの大画面の輝きだけが、部屋の様子
をぼんやりと浮かび上がらせている。

まだ他の文字は来ていないらしい。部屋の中はかろうじて歩くことができる程度の隙間を
残して、床から天井まで本が積み上げられている。ただ、整然と並べられている本は、か
えって部屋を広く見せているようだ。本の背表紙に「国誤辞典」と書かれていることを
「ら」はよく知っているので、ことさら調べてみることはしない。

「だれもないの」

「ら」は部屋の中に入りドアを閉め、声をかける。返答はない。「ら」はゆっくりと本の
間を歩き、テレビの前に進む。テレビでは空港での歓迎セレモニーで「ら」が歌っている
様子を放送している。「ら」はしばらくそれを見てから、それが生放送ではなく録画だ
ということに気づく。テレビは同じ場面を繰り返し再生している。「ら」は不審に思い、ま
わりを見回そうとする。

「ん」は署長室でできたての濁音弁当を食べながら、ドアのレンズに映る「い」をみつめ
て幸せそうな微笑みを浮かべている。弁当が半分くらい売れた頃「い」の肩を叩いて別の
文字が交代した。「ん」は残念そうにうめいたが、交代した文字「こ」を見たとき、こ
れこそが字分の運命の相手だと確信した。

「ん」の心の中に「こ」と過ごした幸せな日々の記憶が蘇り、涙ぐみそうになったが
「ん」には濁点が見つからないので、本当に泣くことはできなかった。

それと同時に「ん」は字分がとある事件の責任を取って失踪していることも思い出した。
それと同時に「ん」は字分が署長室でなく薄暗い室内にいることに気づく。部屋の中はと

ころ狭しと本が積み上げられているが、本はきちんと整理され並べられているので、部屋はかえって広く感じられる。床に落ちていた本を手にとると、その表紙には「国誤辞典」という文字が書かれている。まさかとは思ったが、「ん」はしゃがみこみ、他の誰かに気づかれないように身を隠す。

「ね」の報告書にざっと目を通すと「あ」は何カ所か文章を削除して、確認の印をつける。

「み」はその報告が「ね」のものであると気づくと

「そいつはどうかね」

と尋ねる。「あ」は

「いつも余計なことばかり報告してきて、字分を売り込むことに一生懸命だが、仕事は全然だめだな」

と答え、そう答えた瞬間「み」の質問の本当の意味に気づき、あわててこう付け加える。

「ああ、そっちのほうか。ううむ。確かに、ここにおいておいても役に立たないのだから、そっちで使い捨てにしてもらっても一向にかまわないよ」

「み」はその答えに満足そうになつづくが、あまりにも深ぶかとなつづいたため斜めに裏返り「よ」に変わってしまう。だが「よ」は「み」の意識を維持しており

「じゃあそいつはいただくよ。かわりに優秀なのを一文字やろうか？」

と言う。「よ」にそう聞かれて「あ」はいらないよと答える。

「どうせいつまでたっても目がさめるわけではないんだ。一文字くらいいなくなったって、同じことだ」

「あ」はそう付け加えた。

「ね」は新しい任務につくため、足もとの線をきりりとねじり、このために支給された真新しい「国誤辞典」を小脇に抱えて、いそいそと出発した。

今まで報告書で志願していた任務とは違うが、これはこれできわめて重要な仕事だ。

「ね」は張り切って何度も家を出る場面を繰り返してみたが、ちょっとはしゃぎすぎだと上に判断されたのだろう、最終的にその場面は記憶から削除されたという記憶がある。

訓練機関中「国誤辞典」の中は絶対に読んではいけないと、幾度も教えられた。そんなことをすると命が危ないのだとも言われた。ひらがなに命があるのだろうかとも思ったが、もしも命がもともとないのだとすれば、それを失うことになどなれば、それはきつと取り返しがつかない事態になるだろうから、いずれにせよ命令に従うしかあるまいと「ね」は考える。

国誤真偽会からの召集命令書は今朝届いた。訓練を受けてからもう何年もたったような気

がするが、ほんの数秒なのかもしれない。時間というものはいつまでたってもよく分からない。

命令書には真偽会の開催される場所と時刻が記されていた。もしも行かなければ、すみやかに委員としての役職を罷免されるとも書いてあった。

時間は迫っていた。命令書の来るのが遅すぎるのだ。「ね」は真偽会の仕事ののろさを呪いながら、先を急いだ。

一番気に入ったのは「う」だった。だから「う」は最後にまわし、まず「い」から始めた。

記憶の中では「い」は左側の線の一番下の尖った部分が一番感じるはずだ。「ふ」は動けなくした「い」のその場所を執拗に愛撫する。「い」は汗をかくことができないので、たちまち従順になる。「ふ」はうまく重なるように「い」の上へのしかかりあつという間にひとつになる。

次は「ろ」にした。なかなかセクシーな下半身をしている。「ふ」は「ろ」の全身にたっぷり唾液をそそぎ「ろ」の抵抗を奪った。「ろ」もまた汗をかくことができない文字だから、これも簡単だった。また、うまく上に重なり「ふ」は「ろ」とひとつになる。

三文字目は「う」にした。これも支配するのは簡単だった。苦労もなく重なりひとつになる。

「し」はそれまでの文字の運命を見ていたので恐怖のあまり泣き出してしまった。涙が「し」を「じ」に変えているのを見て「ふ」は舌打ちをする。

「ふ」はこんな場合にと用意していた「濁取り器」をカバンから取り出して「じ」の頭に当てる。「濁取り器」はあまりにも強力だったので「じ」だけでなく「し」の上端の部分を少し削ってしまったが、見た目はほとんど変わらない。「ふ」は瀕死の「し」を裏返しにし、その上に重なっていった。多少はみ出した部分もあったが「濁取り器」を巧みに使ってその部分は削り取ってしまった。

いよいよ最後の「う」の順番になった。

「ふ」は椅子に座り、抵抗できない「う」の様子をながめて楽しむ。「う」も汗をかいたり泣いたりできない文字だからどんな抵抗も無駄だ。すこし震えているのがかえっていとおしく思う。

「ふ」は「う」に近づくとその曲線部分をやさしく撫で、唇をはわせ、舌で味わった。恐怖に震える曲線は何ものにも代え難い味わいがある。

線の両端を少しずつ「濁取り器」で削り「う」が苦痛に絶叫する声を楽しむ。それから

「う」の頭についている短い線を字分の頭の線に揃える。「ふ」はぞくぞくして何か別の文字に変わりそうになるのを耐えながら「う」を字分の形に合わせて変えてゆく。「う」のよだれと体液を「ふ」は体に浴びながら体を重ねてゆく。「う」が「ふ」とひとつになり「ふ」はあまりの快感にぶるっと震える。

その瞬間を狙ったように、扉と窓が破壊され警察官がどっと押し入ってくる。「ふ」は強烈な快楽に痺れた体を動かす気になれず、警官たちのなすがままにさせた。

インタビュアーは退屈な質問ばかりする。「ら」はイライラしていた。

「では、性というものについてはどのようにお考えでしょうか」

「そうね、性別というものはいつも相対的なものよ。相手によって変わっていくわ。性別が変わらないなんて想像するだけで気味が悪い」

「すると性を肯定されるわけですね」

「性は肯定するとか否定するとかいうものではないの。ただそこに存在するのよ。それはひらがなにとっての本質のようなものね」

「あなたには大勢のひらがなの関係が報道されていますが、相手が変わるたびにあなたの性も変わっているということでしょうか」

「その質問には答えられないわね。わたしだって逮捕されるのはいやだわ」

「では、音楽についてお聞きします。あなたにとって音楽とは何ですか」

「まあ、そんな紋切り型の質問、恥ずかしくもなくよく聞けたものね。でもまあいいわ。わたしにとって音楽とは、ひらがなの意味そのものよ。音のないところに意味はないの」

「するとあなたは、ひらがなには意味などないとおっしゃるのでしょうか」

「そんなひねくれた聞き方しかできないのね。もう疲れたわ。この質問で終わりよ。ひらがなと意味とは何の関係もないわ。ひらがなにも意味はある。ただ、それは声に出して読まれたときにだけ生まれるものなの。音にならない文字になんてなんの意味もないのよ。わかった？」

そういうと「ら」は席を立ち、さっさと帰って行ってしまった。

「いつも後に気をつけていなくては大めよ」

という「い」の警告にもかかわらず「こ」は尾行されていることにまったく気づいていなかった。

国道を南に進み、かな式市の門とは反対側に曲がると廃棄された家屋の並ぶ旧市街地になる。

「こ」はいつものように真っ直ぐあの家に向かっている。

「ん」は字分から旧市街地に入っていった「こ」を好都合だと思っている。「ん」は車のスピードを上げ、サイレンを鳴らすと「こ」の車に停止を命じる。

「すこしスピードが出すぎていたね」

いいがかりだったが「ん」は「こ」に話しかけ、免許証を取り上げた。名前は「こ」。見た目通りだ。

「ん」は「こ」に車から出るように命じる。「こ」は困った顔をしながら言われたとおりに車から出る。

「ん」は「こ」の背後から下の線の曲がった部分に手をはわせる。

「こいつ、警官じゃないのか」

と「こ」は思うが「ん」が武器を隠し持つてゐることは分かっていたので抵抗しない。

「こ」が抵抗しないので「ん」は「こ」の体中をなでまわし、唾液まみれにするから

「こ」は「ご」になってしまう。勿論、夢中になっている「ん」は気づかない。

「ん」が「こ」の下から重なろうとしたとき「ん」の背後から襲いかかった何者かによって殴られ「ん」は意識を失う。

「こ」がその文字をみてにやりと笑う。

「いいタイミングだったな」

「また油断したな。面倒なやつを連れてきやがって」

「て」は「こ」にそう言うと「こ」を促し、二文字で「ん」をアジトに運んでいく。アジトは停車した場所の目の前の廃屋だ。窓から「り」がその様子を眺めている。

「今日はよく集まってくれたわ。こんな集会もこれが最後かもしれないわね」

そう口火を切ったのは「り」だった。部屋の中の本は少し片づけられ、テレビの前に全員が座るだけの空間が作られている。

暗闇の中の「こ」をにらみつけ「り」は続ける。

「誰かの連れてきたお友達はとても危険な文字なの。もうここは知られてしまったと考えていいわ。また新しいアジトを探さなくちゃいけない。うんざりだわ」

そう言うと「り」は横に立っていた「れ」に目配せをする。「れ」は闇の中を音もなく移動し手に持った日本刀で「こ」に背後から切りつける。刃の最後を回転させることで

「こ」は「き」の形に変わりこの世界から「こ」が消滅する。自分がテロリストの一員だと気づいた「き」は青ざめるが、すぐに自分の中の冷血に気づき、にたりと笑ってみせる。

「いいわ。それで」

そう言うと「り」は、動けないように拘束された「ん」のそばに寄る。

「ん」はずいぶん前から気がついていたが「り」から目を離せない。「り」こそ自分の運命の文字だ。そう確信したのだ。「ん」はじっと「り」をみつめ、字分の気持ちを伝えようとしている。

「り」は「ん」の下の波線を踏みつけ尋ねる。

「あんたは警察署長だね。テレビで見たことがある。署長自ら摘発に乗り出したというわけ？ それにしては一文字きりだし、妙だわ。いったい何を考えているのか白状しなさい」

そう言いながら「り」は「ん」に激痛を与え続ける。

「ん」はこのときとばかりに話しかける。

「わたしは、あなたを探し続けていたんだよ。あなたはわたしの運命の文字だ。ここまでわたしがたどり着けたのが何よりの証拠ではないか。そうだろう。愛している。わたしと重なってくれ。一緒になって「え」にならないか。「え」になろうよ」

「り」は夢中になって話し続ける「ん」を軽蔑したように見下ろし、唾を吐きかける。

「ふん。頭がおかしくなってるみたいだね。一文字でこんなところに来て、無事だと思ってるみたいだ。重なれ？ 信じられないバカだ」

「り」はそう言う「ん」をそのままにして、仲間に脱出すると命じた。

「て」と「れ」が部屋の中を埋めている辞書に火を放ち、外の様子を伺いながら全員が姿を消してゆく。

「ん」は「り」の後を追いかけて床の上で体をくねらせるが、炎に包まれた本が崩れてくると「ん」はいともたやすく燃え始める。

テレビの画面では「ら」の歌っている映像が繰り返し再生されつづけている。音は消されていたが、本を包む炎がテレビに燃え移ったとき、回路がショートしたのか音声の流れはじめる。炎の狂ったような音と「ら」の歌声がハーモニーを奏でながら、室内に響く。それはこんな歌だ。

かな式愛の物語 歌「ら」

音程のはずれた曲だけど
あなたを想って歌ってあげる

あなたの曲線
あなたの交点
いつも同じでいつも違って

さわってあげるわ
やさしくそっと
あなたが文字でなくなればいい

わたしとひとつになりたいの？

心のねじれた文字だけど
あなたをいつも探しているの

あなたの尖端

あなたの濁点
いつも同じでいつも違って

なめてあげるわ
唾液と舌で
あなたが文字でなくなればいい

わたしとひとつになりたいの？

いつも狂った町だけど
あなたの形にかわっていくの

あなたの指と
あなたの心
いつも同じでいつも違って

見ていてあげるわ
最後まで
あなたが文字でなくなるときまで

わたしとひとつになりたいの？
わたしとひとつになりたいの？

歌はテレビが燃え尽きるまで続いた。

「め」はモニターに映ることになっているベッドの中の文字の生命反応をじっとみつめていた。確かに心臓の鼓動を示す波形が繰り返し描かれている。いやひらがなには心臓はないのでその波形は何か別の意味があるのに違いはない。それにしても「心臓」とは何のことなのだろうか。その何かの形はもうすっかり見慣れていて、もしもかすかな異常があったら、「め」は機械よりも先にその異変を見つけだすことができるだろう。機械よりも優秀なら上司からもっと評価されるのに違いはない。

だが、ひらがなにとってそんな能力にどんな意味があるだろう。ひらがなは日本語を表記するための一群の文字であり、漢字やカタカナと違い、ひらがなだけで日本語の文章をすべて書き表すことができる。だからこそ、ひらがなにとっては、日本語のより完全な表記

に貢献することが、本来の意味であるはずだ。「め」はそう考えて、ため息をつく。全員一致で字分が選ばれたのは、何か裏工作があったのではないだろうか。

メールが300通きていた。差出人は分からない。いつも同じ文面だった。

君のことはよく知っている。君字身よりもよく知っているくらいだ。知るという言葉の定義に依存するかもしれないがね。そして私は君の味方だ。このメールが君を不安にさせているかもしれないが、何も心配することはない。安心したまえ。

私は君の仕事や君の私生活それに君の秘密についてすべて熟知している。証拠を知りたいんだね。いいだろう。

君は字分が何故「め」なのかを知っているだろうか。おそらく君は知らないだろう。真実を教えよう。

君はこのガラスの向こうにいるひらがなの面倒を見るために生まれてきた。そのためだけに作られたと言ってもいいだろう。それ以外に君の存在の意味はない。信じられないのかね。まあそうだろうな。

だがこれは真実だ。それはいずれ分かるだろう。

君が面倒をみているこの「患者」は、君にとってはやっかいなお荷物だ。君はこの仕事を早く終わらせたいと思っている。この文字が目覚めれば仕事は終わるだろうとも思っている。だが、絶対に目覚めないことが明らかになれば、そのときも君の仕事は終わるだろう。君はそう考えている。だとすると、いずれにせよ君の仕事はすでに終わっているしいずれ終わるだろう。

だとすれば悩むこと何にひとつない。そのコンソールの一番上にあるオレンジ色のスイッチを右側に倒したまえ。君も分かっているしそれを望んでいるはずだ。それで君のこの退屈でやりきれない仕事は完了する。君は自由になり、もっと重要で生き甲斐の感じられる仕事を選ぶことができるようになる。

メールはこのような挑発で終わっていた。だが、そのボタンはオレンジ色ではなく赤であり、左右に倒すタイプではなく押しボタンだ。このメールの送信者が、すべてを知っているという主張には、どうも信じがたいものがあった。

「め」がその部屋に入ったのは初めてだった。別に禁止されていたわけではないが、コン

ソール席にずっと座っていたから直接「患者」を見てみようとは思いつかなかったのだ。

「患者」の頭部はたくさんの医療機器で覆われ、どんな顔をしているのか確かめることができない。近くで見ると「め」はその器具のほとんどがダミーであり、そこにつながっている線や管が途中であからさまに切れてしまっていることに気づいた。

「め」は慎重にダミーだけを見つめていった。「患者」顔が少しずつ見えてきた。

「患者」は「の」だった。

初めて見るひらがなだが、ひらがなは読めばそれが何なのかはすぐに分かる。

「め」はそのひらがなに奇妙な親近感を覚え、その頬に手を延ばした。近づくとつれて「の」の周囲が奇妙に冷たいことに気づく。次第に指先が凍りはじめ痺れてくる。「め」はそれでも指を延ばし「の」に指先をどうにかして触れようとする。手首まで真っ白に冷凍されたとき「め」の指先がかすかに触れる。だが「め」の冷凍された指には触れたという感覚はない。

その瞬間「の」の瞼が開く。ゼンマイ仕掛けのおもちゃのように、ためらいなく一瞬で開いた目が、無邪気に「め」を見ている。

「め」は驚いたが、医療訓練で教わったとおりの挨拶が、反射的にでてきた。口元には微笑みを浮かべながら。

「おはようございます。おめざめですか。ご字分のお名前は覚えていますか」

すると「の」は目をくるくるとまわしてあたりの様子をうかがい、ふたたび「め」をじっとみつめてから、こう言った。

「はろう。ようやく時間がきたようだね」

「の」は医療訓練で患者としてのコースを履修していないようだ。これは正しい返答ではない。「め」はそう思ったが微笑みは崩さなかった。

そのとき「め」の背後のドアが開いて監視者たちか部屋の中に入ってきた。

「の」は監視者たちを整列させると、次々に指示を下していった。

「指名手配犯の部下は慎重に選択されているか」

「警察署長の行動を描写しろ」

「弁当屋の店員を心理分析するんだ」

「市場の流通に解説をつけろ」

「歌についての考察は削除だ」

監視者たちは指示を実行するため、あわてふためいて部屋を飛び出していった。

「め」は再び「の」と二人きりになったが「の」が何かを夢中になって考えているようで、話しかけることはできなかった。

しばらくして「の」が言った。

「このあたりに海はあるのか」